



特集 建築のまちを旅する 18

宇都宮

過去から未来へ、
大谷石の軌跡をめぐる



表紙の写真

〈日本聖公会 宇都宮聖ヨハネ教会
礼拝堂〉の塔屋

設計 | 上林敬吉

外壁はすべて大谷石張りの礼拝堂。構造は鉄筋コンクリート造。大谷石のなかでも稀少な、黄みを帯びたなかに黒色の模様が混じる「虎目」が使われている。宇都宮における聖公会の伝道活動は1893年に始まり、1910年に講義所が現在地へ移って翌年に教会として独立し、1933年に現在の礼拝堂が建てられた。設計は上林敬吉で、開口部の尖頭アーチや控え壁（バットレス）などはゴシック建築の言語に則っている。「カトリック松が峰教会聖堂」と並び、大谷石建築を象徴する教会だ
[写真:小松正樹]

左写真

〈旧篠原家住宅〉の石蔵

設計 | 不詳

第二次世界大戦の宇都宮空襲を免れた大谷石造の建築。醤油醸造業や肥料商を営んでいた豪商・篠原家の石蔵で、江戸末期に建てられた。2階建てで、醤油醸造に用いる道具などを入れていたという。防火性を高めるため、木造の土壁に大谷石を張って仕上げており、組積造とは違い、石を縦向きに張っているのが特徴だ。さらに、漆喰によるカマボコ目地や釘隠しが強い意匠性を与えている
[写真:小松正樹]

LIXIL eye no.30
2024年1月20日発行

発行 | 株式会社LIXIL
編集発行人 | 對馬儀昭
LIXIL Housing Technology
営業本部 TH統括部
〒141-0033
東京都品川区西品川1-1
大崎ガーデンタワー 24階
Tel: 050-1790-5838
Fax: 03-4363-6434
制作 | 株式会社フリックスタジオ
デザイン | 株式会社ラボラトリーズ
印刷 | 竹田印刷株式会社

* 本記事の無断転載を禁じます
* 本文中の敬称は省略させていただきました

『LIXIL eye』のバックナンバーは
インターネットでご覧いただけます。
<http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/>

CONTENTS

特集

04 建築のまちを旅する | 18

宇都宮

06 テーマ1

過去から未来へ、大谷石の軌跡をめぐる

ナビゲーター | 安森亮雄

12 旧篠原家住宅 / 日本聖公会 宇都宮聖ヨハネ教会礼拝堂 / ちよっ蔵広場 / 旧大谷公会堂

16 宇都宮建築めぐり

22 住宅クロスレビュー | 18

伸縮するマンション住戸

海法 圭「東成瀬の4層」× 岩元真明「桜坂の自邸」

32 建築家の〈遺作〉 | 15

清家 清「札幌市立高等専門学校（現・札幌市立大学）」

談 | 奥山健二

36 新世代・事務所訪問 | 18

三木佐藤アーキ

ナビゲーター | 門脇耕三

44 構造家の新発想 | 18

PCa+PC(プレキャスト・プレストレストコンクリート)造のプロセスデザイン

安藤耕作

48 触覚デザイン | 15

今井兼次のドアハンドル

ナビゲーター | 笠原一人

52 土木のランドスケープ | 18

花園町通り

ナビゲーター・文 | 八馬 智

58 TOPICS

LIXIL熊山工場で自家消費型太陽光発電設備が稼働

文 | 石原孝芳

60 INFORMATION

LIXILビジネス情報サイトのご案内 / LIXILからのご案内 / 展示のご案内

64 紙上の建築 | 18

小さくて暗い 広大な世界

湯浅良介

関東では昭和の住宅の石塀として馴染みのある大谷石。

フランク・ロイド・ライトの旧帝国ホテルに使われたことでも有名だ。その産地がここ宇都宮にある。

この石は、古くから石材として利用されてきた歴史がある。

採掘と加工が容易で、農閑期の手仕事としても切り出されてきた庶民の石だ。

石は市内の豪商の家、蔵、塀、そして教会や公共施設に使われ、宇都宮の顔となった。

リノベーションや現代建築でも使われ続ける、いまなお新しい大谷石の風景を訪ねてゆく。

大谷町で唯一、露天掘りを行う「カネホン採石場」。大谷のなかでもこの場所は地表が薄く、土を5mほど取り除けば石の層が表れる。だから露天掘りに向いていた。レールに載せたチェーンソー切断機で矩形に溝を切り、割り矢（榎）を打つことで側面や底面を岩盤から切り離す。そして1段ごとに掘り出して、徐々に深度を下げてゆく。正面奥左に見える横穴は、採掘中に見つかった昔の坑道。大谷の地下では、いくつもの採掘場が交差する。カネホンの採石場は稼働中ながら、見学施設としても運営している【写真：小松正樹】

宇都宮

特集「建築のまちを旅する」18

テーマ1

過去から未来へ、大谷石の軌跡をめぐる

ナビゲーター | 安森亮雄 (千葉大学 大学院工学研究院 建築学コース 教授)

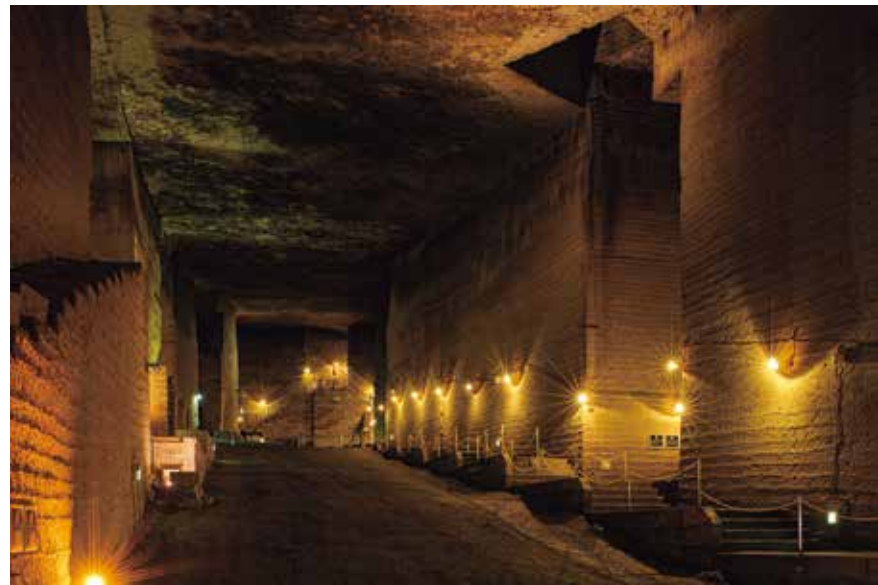
取材・文 | 長井美咲
写真 | 小松正樹 (特記以外)

01 | 日本遺産

日本遺産は「地域の歴史的の魅力や特色を通じて、わが国の文化・伝統を語るストーリー」を文化庁が認定するもの。日本の文化遺産保護制度の一つで、各地域の有形・無形の文化財を地域が主体となって整備・活用し、国内外へ発信することで地域活性化を図ることを目的としている。2015(平成27)年に創設され、104件が認定された

02 | 大谷資料館

大谷石の地下採掘場跡の現場展示を中心に、地質や採掘技術・道具の展示などが行われているミュージアム。採掘場跡は広さ2万㎡、深さ30m。その内部では岩肌を手掘り時代のツルハシ跡や機械化後のチェーンソー跡が残る。圧巻の光景だ。1919年から1986年まで操業し、戦中は軍需工場、戦後は政府米の貯蔵庫としても使用された。現在は見学施設としての活用だけでなく、コンサートや演劇などの上演、映画やテレビドラマ、プロモーションビデオの撮影なども行われている



大谷石は栃木県宇都宮市の大谷町で多く産出される凝灰岩だ。耐火性に優れ、軽くて軟らかく加工しやすいため、地元の宇都宮では古くから住宅や石蔵の外壁、石塀、民具などにも幅広く用いられてきた。輸送手段の発達や採掘の機械化により東京や横浜などにも大量に出荷され、近代都市の形成や戦後復興、高度経済成長期の建設需要を背景に産業として飛躍し、1970年代前半に最盛期を迎えた。生産量は減少したものの、現在でも採掘が続いており、「日本遺産」認定を機に、大谷石が放つ魅力に再び脚光が集まっている。その魅力を解き明かそうと、千葉大学教授の安森亮雄氏の案内のもと、宇都宮の各所を訪ねた。

2018(平成30)年、「地下迷宮の秘密を探る旅 大谷石文化が息づくまち宇都宮」が日本遺産⁰¹に認定され、宇都宮の市街地はもとより北西部の大谷町にも国内外から多くの観光客が訪れている。大谷町にはこれ以前から、大谷石の地下採掘場跡を活用して採掘の歴史を伝える「大谷資料館⁰²」があり、壮大かつ神秘的な雰囲気から人気を集めている。さらに日本遺産への申請のために地域活性化を目指すさまざまな取り組みや整備が進み、2023(令和5)年11月には国登録有形文化財「旧大谷公会堂」を中心とする新たな観光周遊拠点「大谷コネクト」も開業した(関連15ページ)。

大谷石は、地質学では火山の噴出物が固結し

た凝灰岩に分類される。日本列島がまだ海の底にあった1500万年前、海底火山の活動で噴出した軽石流が大量に堆積し、長い年月を経て固まり岩石となった。ナビゲーターの安森亮雄氏は「大谷石を含む緑色凝灰岩(グリーンタフ)は日本列島に広く分布しています」と話す。グリーンタフ地帯は日本海側から内陸部の北関東にも入り込み、それに栃木県の一部が位置する。そのため県内では大谷石以外にも田下石や徳次郎石、深岩石など、さまざまな凝灰岩が産出されてきた。

緑色凝灰岩はその名の通り全般的に緑色で、それは岩石に含まれる有色鉱物が緑泥石(鉱物の一種)に変質した結果だ。大谷石の場合は掘ったばかりの状態では青みを帯びた灰緑色、かつ水分を含んでおり、空気に触れて酸化・乾燥することで灰白色から明褐色へと変わっていく。そして石肌に茶色の不規則な斑点が見られる。これは粘土化した軽石・鉱物で「ミソ」と呼ばれ、軟らかいため長い年月の間に抜け落ちていく。大谷石の素朴で温かみのある独特の風合いは、このミソと多孔質な構造が生み出すところが大きい。

大谷石はミソの大きさに石目が分類され、ミソが小さい石は「細目」、ミソが大きい石は「荒目」、その中間あるいは大小のミソが混在する石は「中目」と呼ばれる。ミソが小さいほど肌目が細かいが、大谷石らしい風合いを感じられるのは中目だろう。強度とコストのバランスも良い。一方、ミソの周りは硬いことから荒目は硬く、そのぶん風化しにくく、外構や土木的な用途に適している。



03 | 宇都宮大学峰キャンパス フランス式庭園(左)とUUプラザ(右)

宇都宮大学の峰キャンパスは、1922(大正11)年に創設の「宇都宮高等農林学校」(同大の前身)があった場所で、建学時代の木造講堂や大谷石造の旧・図書館書庫(ともに1924年竣工)が残る。UUプラザの改修設計では「大谷石が、建物の基壇として庭園の一部となり、近付くとカウンターやベンチがあるという、風景と居場所の双方の役割を果たすことを考えました」と安森氏



石蔵・倉庫から教会まで 建材として大活躍

大谷石は加工しやすく、耐火性に富むことから、地元では古くから建材として活用されてきた。JR宇都宮駅から大谷町に向かう前に、そのいくつかを見て回ろう。まずは駅東側の「宇都宮大学 峰キャンパス⁰³」のフランス式庭園だ。前身の宇都宮高等農林学校の開校の4年後に作庭され、園路や鉢植えなどに大谷石が使われている。その傍らには大谷石の組積造で建てられた旧・図書館書庫もある。また、庭園に隣接して立つ「UUプラザ」は安森氏が改修設計を手がけ、基壇状のコリドーに大谷石を活用。安森氏は千葉大学の前は宇都宮大学に奉職しており、そのことが大谷石の研究を始めるきっかけだったという。

次は西に向かい、JR宇都宮駅前の歴史的シンボルでもある「旧篠原家住宅」へ。主屋と新蔵、文庫蔵、石蔵に大谷石が使われており、1895(明治28)年に建てられた主屋と新蔵は国の重要文化財に指定されている(関連12ページ)。

大谷石を使った建造物の構法は、「張石」と「積石」に分けられる。旧篠原家住宅の石蔵は、木造の軸組に石を張った「張石」だ。近世以前の日本の蔵は板蔵が主体だったが、耐火性を高めるために土や漆喰を外壁に塗った土蔵が江戸時代に出現し、石を産出する地域では土蔵の一部や板蔵の外壁全体に石を張ったものが登場する。宇都宮近辺ではそのときに大谷石を張ったのが石蔵の起源だ。張る石は薄い板状で、木部に鉄釘で留める。さらに構造的・意匠的な観点から目地に漆喰を塗り、開口部周りには、より緻密で硬質な石材を用いることもあった。

「積石」には木骨を伴うものもあるが、多くはいわゆる組積造だ。わが国の近代化とともに、煉瓦や石を積み上げる西洋建築が導入されたことや、鉄道などの輸送手段が発達して重い石材も遠くまで運べるようになったことから普及し、主に大正期以降の建造物に見られる。

さらに西へ進むと、同時代に建てられた大谷石の教会建築を二つ見ることができる。一つは東武宇都宮駅の近くに立つ「カトリック松が峰教会聖堂」で、建築家のマックス・ヒンデル⁰⁴が設計し、1932(昭和7)年に竣工。当時の最新工法である鉄筋コンクリート造に地域固有の建材である大谷石を組み合わせ、西洋中世で花開いたロマネスク建築を昭和初期の宇都宮に蘇らせた。外壁のそここに施されたロマネスク風の装飾は、レリーフ彫刻を施しやすい大谷石の特性を活かしたものだ。

もう一つは「日本聖公会 宇都宮聖ヨハネ教会礼拝堂」だ。ジェームズ・マクドナルド・ガーディナー⁰⁵に師事した上 林 敬吉⁰⁶の設計により、1933(昭和8)年に竣工した。鉄筋コンクリート造の外壁に大谷石を張っているところは松が峰教会と同じだが、こちらは石の質感を最大限に活かして装飾を排し、イギリス中世の簡素な石造教会を偲ばせる趣がある(関連13ページ)。

大谷町へはここから北西に車で15分ほどだが、南下して東武宇都宮線の南宇都宮駅⁰⁷にも寄った。大谷石を用いた駅舎で、竣工時の姿を留めるのは県内でもここだけだからだ。また、駅の北側には1950年代に「積石」で建てられた蔵や倉庫が残る一画があり、「南宇都宮石蔵倉庫群」と呼ばれ、創造の場や店舗として再生されている。

その石蔵や倉庫を眺めて「この「ツル目」がいいですよ」と安森氏。見ると、大谷石の表面に斜め方向の筋目がある。これは石工がツルハシで石を掘り

04 | マックス・ヒンデル

スイス出身の建築家(1887-1963)。1924(大正13)年から札幌を拠点に設計活動を始め、北海道で教会関係を中心に16余りの建物を設計。1927年に横浜に移り住んで以降は北海道以外にも作品がある

05 | ジェームズ・マクドナルド・ガーディナー

アメリカ人建築家、教育者、信徒宣教師(1857-1925)。米国聖公会から日本に派遣された。建築家としては京都の「聖アグネス教会礼拝堂」や「京都聖ヨハネ教会初代礼拝堂」などの設計で知られる

06 | 上林敬吉

日本聖公会の信徒建築家(1884-1960)。京都出身。茨城県土木課に出仕後、下田菊太郎が横浜で営んでいた設計施工会社を経て、1906(明治39)年にガーディナー建築事務所⁰⁵の所員となる。ガーディナーの逝去後、その仕事を引き継ぐとともに自身の事務所を開設し、日本聖公会の宣教師建築家として米国聖公会の宣教師建築家のジョン・ヴァン・ウィー・バーガミニとの協働を始め、数々の礼拝堂を生み出した



07 | 東武宇都宮線・南宇都宮駅

1932(昭和7)年に開業した当時の駅舎の原型を留める。外壁の石の張り方は、腰壁より下が横方向、上は縦方向という珍しいもの。東京の東武東上線・ときわ台駅の駅舎と外觀が瓜二つで、ときわ台駅にも大谷石が使われている[写真:編集室]



08 | 屏風岩

居住用に建てられた西蔵(上写真左、座敷蔵)は1908(明治41)年の竣工、倉庫としてつくられた東蔵(穀蔵)は1912(明治45)年の上棟。西蔵は外観にアーチや繊細な装飾を用いた寄棟屋根の洋風意匠、切妻屋根の東蔵は表面の棟持柱と柱頭などの折衷的な装飾が見られるという異なる特徴がある。いずれもこのち普及した大谷石の石蔵のモデルになった。敷地内では大谷石を使ったモダンな事務所棟(写真左)や石瓦を載せた納屋なども見られる



09 | 大久保石材店

石材店としての創業は明治時代。2010年ごろまで採掘業、2019(令和元)年まで石材販売業を続けた。石室は1924(大正13)年に完成。巨岩に接して建てた大谷石積みの倉庫や、モダンデザインを取り入れた端正な石蔵など、敷地内にはさまざまなタイプの大谷石建築がある。安森氏は「石を生業としている家ならではの石の扱いや空間が面白く、いま残っていることも貴重だと思います」と話す



10 | 大谷公園と平和観音

露天掘りの跡地を利用した公園で、目玉は高さ27mの平和観音。戦没者の供養と世界平和を祈ってつくられた。制作は東京美術学校出身の彫刻家・飛田朝次郎氏が手がけ、大谷の石工たちが彫刻。6年の歳月をかけ、1954(昭和29)年に完成した。この観音像に至る参道では「天狗の投げ石」などの奇岩を見ることが出来る



出すときに付けたもので、ツル目のある石は手掘りであることを意味する。手掘り時代の石工は、石材としての基本サイズである「六十石」(厚さ6寸、幅10寸、長さ3尺)を掘り出すのにツルハシを約4000回振り下ろしたといわれる。「ツル目は当時の石工たちの手の痕跡で、その息づかいが伝わるようでしょう。石はそうした物語を“読める”のが面白い」。大谷町では1960年代ごろまでに採掘作業の機械化が進んだ。だからツル目はそれ以前に掘り出された石の記した。

人々の暮らしに寄り添う “民衆の石”

大谷石の層は大谷町の周縁まで広がり、深さも相当あり、その埋蔵量は約6億トンと推定されている。これほど大規模な凝灰岩の採掘地は世界的にも稀少だ。地元の人々は異口同音に「この一帯は掘ればどこでも石が採れる」といい、かつては採掘場が約250カ所あった。

大谷町の玄関口ともいえる場所には、訪れた人々を迎えるように、あるいは石材業の威勢を誇るかのように、石材店「屏風岩⁰⁸」の立派な石蔵が2棟並び立つ。これは同社の創業者で、のちに「大谷の石材王」と称された渡辺陳平が自ら設計し、明治期に建てたものだ。渡辺は大谷石の将来性に着目し、軽便鉄道を敷設して輸送の便を図り事業を拡大するとともに、宇都宮石材問屋組合(現・大谷石材協同組合)を組織し、業界の発展に尽力した。また、政治家としても活躍した。石蔵には密会のための座敷があり、かつては栃木県政の裏舞台だったという。

大谷街道を少し進むと「大久保石材店⁰⁹」の名を掲げた巨岩が目に入る。巨岩に付随してつくったように見える四角い部分も岩山の一部で、中は石室。外側がきっちり成形されているだけではなく、内側もきれいに削り貫かれていて驚く。当主の大久保泰宏氏によると、大正時代に異(南東)の方角を開けると運気が上がると古い師に勧められたことから、岩山を切り通して屋敷の出入口をつくり、そのときに石室も整備した。「私が子どものころまでは石室を石材店の事務所として使っていました」という。

屋敷の手前には、かつて大谷石の加工場兼石置き場として使われていた場所が残る。ここから石をトラックに、のちにトラックに積み出したので、加工場はトラックの荷台と同じ高さだ。大久保氏は地域の声に応えてこの場所を開放しており、休憩や交流の場「ISHIKIRI TERRACE(イシキリテラス)」として利用されている。安森氏は「産業遺産を、いまのまちづくりに活かすのは、時間のレイヤーを重ねる良い取り組みだと思います」と語る。

大谷街道をさらに進み、「大谷公園¹⁰」の入り口に到着。この公園は露天掘りの採掘場の跡地を整備したもので、戦後、その採掘面に彫られた高さ27mの平和観音に至る参道も昔は産業軌道だった。

さらに観音像の裏手に回ると大谷寺¹¹があり、平安時代の作と推定される磨崖仏を見ることが出来る。本尊の千手観音をはじめ4組10体の仏様が、大谷石の岩面に直接彫られている。この石仏は古くから大谷観音と呼ばれ、鎌倉時代には坂東三十三観音の第19番霊場となり、多くの人が巡礼に訪れていた。「大谷という名前は石材産業が隆盛する前から広く知られ、そのため大谷石と名付けられたようです」と安森氏は話す。

大谷石の採掘は農業の副業として江戸時代に広まり、日本が近代化するなかで産業として確立していった。大谷石を使った建物が宇都宮以外の地域に登場したのは大正末期から昭和初期のこと。アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトが設計を手がけ、1923(大正12)年に竣工した「旧帝国ホテル」は、大谷石が日本の近代建築に初めて使われた例だ。大谷石をふんだん、かつ大胆に用いてその存在を知らしめた。

ライトはなぜ大谷石を採用したのか。当時、国会議事堂などに使う石材を検討するために、国内各地の石材の調査が臨時議院建築局により行われた。ライトはそうした資料を見て、石川県小松市産出の「菩提石」を当初は候補にしたという。最終的に埋蔵量や産出量、輸送手段などの条件から大谷石が使われたが、ライトを選んだのはいずれの場合も凝灰岩を中心とする「軟石」だ。

これに対して国会議事堂などに使われた茨城県産出の「稲田石」は花崗岩であり「硬石」。安森氏は「国家の顔となる建物の外装に軟石が使われることはありません」という。「軟石は軽加工しやすいために、石蔵や納屋といった暮らしに密接な建物に用いられました。いわば民衆の石なんです」。

旧帝国ホテルにおけるライトの石使いで、安森氏はスクラッチタイルやテラコッタとの組み合わせにも注目する。「大谷石を含めて3種とも陰影のある素材で、ライトの有機的なデザイン志向の一端が読み取れます。また、水平線を強調する部分に大谷石を用いて、ライトの建築の特徴である水平的な空間の連続性を生み出している。これらから、ライトはモダニズムとヴァナキュラー(風土の様式)の融合を目指したのではないかと思うのです」。

ホテルの建設では大量の大谷石が必要だったため、運営会社は大谷町の採掘場を一山買った。その山はいまも「ホテル山」と呼ばれ、石碑が立つ。



11 | 大谷観音と大谷寺

大谷寺には本尊千手観音を筆頭に、脇堂の釈迦三尊・薬師三尊・阿彌陀三尊を合わせて10体の石仏があり、1954(昭和29)年に国の特別史跡に、1961(昭和36)年に国の重要文化財に指定された。日本最古の石仏であり、大分県の「白杵(うすき)磨崖仏」に対し「東の磨崖仏」として知られる。千手観音は、最新の研究ではパーミヤン石仏との共通点が見られることからアフガニスタンの僧侶が彫刻したと考えられているという

12 | 渡邊哲夫

1955年生まれ、中央工学校卒業。28歳のときに旧帝国ホテルの復元の話がもち込まれ、1年半の月日をかけて作業にあたった。写真は工房にある、現帝国ホテルのロビー壁面を飾るレリーフ作品の一部を再現したもの。40種に及ぶ道具を使い、すべて手で彫った。「大谷石は機械を使って彫ったら角が立ちません。石と対話しながら、刃を入れる角度や削り方の強弱を変える必要があります」と、大谷石を彫刻する魅力や難しさを語る(写真:編集室)



13 | 徳次郎石と石蔵のまち並み

徳次郎町は6つの集落からなり、写真は特に石の建造物が残る西根集落。「徳次郎石は山頂付近から採掘され、機械化が進まなかったため、この地域だけで主に使われています」と池田貞夫氏。家々を見て歩く、洋風の意匠を取り入れた建物や部分もあり、「当時の人たちの遊び心でしょう。文化は遊びがないと育ちません」。このまちには鎮守・智賀都(ちかつ)神社の付け祭りに用いられる見事な彫刻の屋台も6台、江戸時代から残る





14 | 大谷石産業 石の里希望

現在稼働中の地下採掘場。石の採れる地層が深い場合は立坑をつくってから横へ掘り進む地下採掘場となる。上から1段ずつ、丁場と呼ばれる採掘場を掘り下げていく。安全性を高めるため、柱の太さや天盤の厚みは想像以上に大きい。深さが1段ずれると石の色がかなり変わることがあるため、掘り出した石は丁場ごとに目印を付けておき、使用先の建物で色がまばらにならないようにしている



15 | カネホン採石場

大谷町で露天掘りを行う唯一の事業所。使われている平場掘りの採掘機は1950年代後半に開発されたものだ。大谷石の地層は海底火山から生成されたので「石を舐めると塩分を感じますよ」と高橋氏。同社では大谷石の碎石を混ぜた左官塗材なども開発・販売している

旧帝国ホテルは解体後、中央玄関部分が愛知県犬山市の「博物館 明治村」に移築保存された。このとき、彫刻の破損部分の復元を手がけた大谷石彫刻家の渡邊哲夫氏¹²が、ホテル山から少し北上した新里町に工房を構えている。「大谷石は軟らかいといわれるけれど、実は硬い部分も結構あるんです」と渡邊氏。その硬い部分についてくわすかは彫ってみないとわからないから、制作過程は「いい緊張感の連続」という。

旧帝国ホテルの彫刻制作には大量の石工が投入された。「明治村に残るオリジナルの彫刻を見ると、腕の立つベテランが相当数いたことがわかります。近寄って見たときと少し離れて見たときで仕上がりが具合が違う。パッと見は雑でも離れて見ると彫刻がくっきりとしている。これはすごい」。渡邊氏が復元にあたっては28歳のときで、「オリジナルに忠実であることに必死で、このことに気づきませんでした」と語る。

このあとはさらに北上して徳次郎町にも足を延ばし、宇都宮市文化財調査員で同町在住の池田貞夫氏と合流。日光街道の宿場町として栄えた徳次郎は6つの集落からなり、西根集落の西側に位置する男抱山^{おただきやま}北方の山頂付近で、大谷石と同じ凝灰岩がかつては採れた。大谷町の石よりも目が細かく、やや青みがかり、ミソがほとんどないことから、「徳次郎石」と呼んで区別されている。

徳次郎石は均質で細工に適しているため、彫刻や石瓦などに重宝され、西根集落では採掘や石工の仕事が盛んだった。石の建造物がいまでも多く残り、“石のまち並み”を楽しめる¹³。火災発生を機に防火意識が高まり石蔵や石塀が普及したことも、石造の連続的なまち並みが形成されたことにつながっているという。宇都宮のこうした石蔵などのまち並みでは、ほかにも上田^{うわだ}集落や芦沼集落が日本遺産の構成文化財になっている。

坑内掘りと露天掘りで今も採掘

大谷町で石の採掘が最も盛んに行われていたのは、1950年代半ばから70年代半ばまで。戦後復興や高度経済成長期の住宅地拡張などで東京など都市部での大谷石の需要は高く、採掘業者は120社以上あった。宇都宮と大消費地・東京の距離はおよそ100kmで、この近さが有利に働き、最盛期の1973(昭和48)年には年間89万トンを出荷。金額にすると92億円に達した。1966(昭和41)年に公開された高倉健主演の映画『昭和残侠传 唐獅子牡丹』に、そのころの採掘業者の羽振りの良さが描かれている。

しかしその後、コンクリートブロックの普及など建材の多様化や、建築基準法の改正で組積造が規制されたことなどの影響を受け、大谷石の需要は徐々に減少。それとともに採掘業を営む事業者が相次ぎ、2023(令和5)年のいまでも続けているのは、わずかに4社である。

そのうちの2社に、現在稼働中の採掘場を見せてもらった。「石の里希望¹⁴」の名を掲げる大谷石産業の採掘場では、地下空間をつくる「坑内掘り」を行っていて、立坑は14年前に開設した。「大谷町全体で30年ぶりに新設した立坑でした」と広報部長の飯村淳氏は振り返る。立坑は「四角い煙突を地中に建てるようにつくる」そうで、ここでは周りを掘り、大きき7m角、深さ23mの“四角い煙突”を建てて埋めた。その壁は厚さ1mのコンクリートで築き、地下50mまで下りられる昇降機を設置。この15年間で立坑より約20m掘り、いまの丁場は約60mの深さにある。

石の採掘方法には、垂直方向に掘り下げる「平場掘り」と、水平方向に掘り進める「垣根掘り」があり、大谷では明治時代まで平場掘りが主流だった。しかし、良質な石の層とミソを多く含む層が縞状に積層する大谷では、平場掘りは必要な石を採

るために要らない石を取り除かなければならず、効率的な方法とはいえなかった。これに対して垣根掘りは、石の層に沿って四角い横穴を掘り進む方法で、求める質の石を無駄なく得ることができる。明治末期から大正初期に伊豆長岡の石工からこの技術が伝わると、以降は平場掘りと垣根掘りを組み合わせる方法が主流になった。

丁場で石を切り出すときは、採掘機で石にまず溝を入れる。そしてその溝に「割り矢」を打ち込み、その矢をハンマーかつツルハシで叩いて圧力をかけて石を起こし、地面から切り離す。採掘機は1950年代後半から60年代にかけて大谷石材協同組合がフランス製チェーンソー裁断機をベースに開発したものだ。安森氏は「この採掘機は全国の軟石の産出地に普及して、いまでも各産地で『機械は大谷から来た』といわれます」と話す。

切り出したばかりの大谷石は水分を多く含んで青々としているが、2-3週間後には乾いて青みも抜ける。これらの原石は工場に運び、板状などに加工して出荷する。大谷石産業では規格サイズ・形状以外にもさまざまな特注に応じ、機械でできない細かな加工も、専門の職人が手作業で行う。

一方、カネホンの採石場¹⁵では大谷で唯一、「露天掘り」が行われている。その現場は高さ30mを超える岩盤の断面に囲まれ、実に壮大だ。断面には地層とともに、山の頂上から切り崩してきたこれまでの採掘の歴史が表れ、地球規模での時間の蓄積と人々の地道な営みが交わる。

代表取締役の高橋卓氏は「他の地域は地表を覆う土を20-30m取り除かないと石が出てこないのですが、ここは昔の地名が立岩^{たていわ}というくらい、地表が薄い。だから露天掘りを始められました」と話す。坑内掘りに比べて無駄が多く、天候にも左右されるが、安全性が高く、大きな形状も採れるというメリットがある。丁場での採掘作業は坑内掘りと基本的に同じで、違うのは最後、切り出した石の搬出方法くらいだ。坑内掘りではクレーンで地上に持ち上げるが、露天掘りでは油圧ショベルでトラックに積む。

“時層”がつくる大谷の場所性

産業としての規模は縮小したとはいえ、大谷石には膨大な歴史と文化の蓄積がある。それを活かして、大谷石の新たな価値の発信や地域の活性化を図る動きも県内を中心に活発だ。

大谷石を活用した現代建築では、鬼怒川^{ほろしゅう}を挟んで宇都宮の北東に隣接する高根沢町のJR宝積寺駅前に、2006(平成18)年に誕生した文化コミュニティ施設「ちよつ蔵広場」が特筆に値する。設計

手がけた建築家の隈研吾氏は、解体した石蔵の大谷石に鉄板を組み合わせた構造システムを考案し、大谷石による新たな建築表現を試みた(関連14ページ)。

古い石蔵を店舗などに活用する例は市内にも多いが、大谷町東側の瓦作街道^{かわらさき}沿いに2023年4月にオープンした日本茶カフェ「キジハジメテナク¹⁶」では、オーナーの坂本静和氏のセンスが光る。石材加工業を営む坂本氏は「大谷石の良さを気軽に体感してもらいたい」と、自宅敷地内の古い石蔵を利用してカフェを開いた。

瓦作街道にはかつて軽便鉄道が走り、荒針・瓦作・立岩という3つの駅があった。「産業軌道¹⁷」と呼ばれるその線路や駅の跡地は公園などになっているが、十分に活用されているとはいえない。また、大谷資料館や平和観音などの観光スポットや大型商業施設は大谷地区の西側にあり、近年は道幅の狭い大谷街道に人や車が集中して渋滞するという課題もある。

坂本氏は瓦作街道側を「裏大谷」と呼び、その拠点として店を育てていきたいと考えている。「宇都宮は『自転車のまち』も謳っているので、当店の駐車場に車を置いて大谷を回遊できるように、レンタルバイクも始めます。オリジナルの自転車マップも作成中で、裏大谷から大谷のまた違う面をご紹介します」と思っています。

産業軌道の再生による地域の回遊性は安森氏も以前から関心を寄せるところだ。軽便鉄道は大谷町南端の荒針駅から当初は官鉄(のちの国鉄)鶴田駅まで、1931(昭和6)年になると東武鉄道の西川田駅へも通り、大谷石は両駅から東京方面に運ばれた。前述のイシキテラスも同様に産業の歴史を伝えるもので、「石の産業と文化の時間が重なった『時層』がつくる場所性は、大谷全体のまちづくりの観点から大きな意義があると思う」と語る。

「大谷石は、建築という単体で切り取るだけでなく、地層から、生業や産業までを含めたさまざまな物の連関から捉えると、また新たな魅力と可能性を感じます」と安森氏。大谷石の軌跡は未来へと続いている。



16 | キジハジメテナク

築約100年の石蔵の改装では2階に開口部を新たに設け、客席から外の自然を眺められるようにした。塀やエントランスの敷石などには、坂本氏が営む石材加工会社「バーンストーン」の製品を用いて、奥行150×幅900×高さ70mmと見た目の細い石でつくった塀が特に目を引く。「いまの住宅に合う塀を模索しました。目地が多く施工の手間がかかるので、『五十石(ごとういし)』にあらかじめ目地を入れておくなど改良中です」と語る



17 | 産業軌道跡

大谷町では明治期に石材輸送のための鉄道軌道が敷設され、産業の発展に大きく貢献。特に東側では瓦作街道沿いに軽便鉄道の駅舎跡や廃線跡が残るが、写真の瓦作公園(旧瓦作駅)のように、活用されているとはいいがたい状況だ(写真:編集室)

制作協力: 橋本優子(デザイン史家・宇都宮大学大学院博士後期課程)

安森亮雄 やすもり・あきお
1972年生まれ。1996年東京工業大学工学部建築学科卒業。2002年同大学理工学研究所博士課程修了後、同大学助教を経て、2009年から2020年まで宇都宮大学准教授。2020年4月より千葉大学大学院工学研究院建築学コース教授。主な研究分野は建築と都市の関係性で、地域素材はそのテーマの一つ。

長井美咲 ながい みあき
編集者、ライター／山形県出身。日本女子大学家政学部住居学科卒業後、『室内』編集部に所属。2006年よりフリーランス。

旧篠原家住宅

主屋・新蔵竣工 | 1895年 文庫蔵竣工 | 1851年

石蔵竣工 | 1851年ごろ

設計 | 不詳

豪商に相応しい風格を放つ外壁

宇都宮を代表する豪商の一つだった篠原家は、江戸時代から旧奥州街道口にあたる現在の場所で醤油醸造業や肥料商を営んでいた。いま残る住宅と石蔵3棟のうち1棟は明治期、2棟は江戸末期に建てられたもの。戦災により醤油醸造蔵や米蔵などは焼失した。いわゆる見世蔵と袖蔵の構成で、安森氏は「見世蔵は平入りで下屋を出して構え、袖蔵が横にある。これは関東の蔵の特徴です」と話す。

主屋は1階が約52坪、2階が約48坪、合計100坪という大きさ。黒漆喰や大谷石を用いた外壁、商家を特徴づける店先の格子などとともに、堂々とした風格があり、宇都宮の歴史的シンボルとなっている。1996（平成8）年に宇都宮市に寄贈され、2000（平成12）年に主屋と新蔵は国の重要文化財に指定された。大谷石の国指定重要文化財（建造物）はこの建物だけだ。

石蔵3棟はいずれも「張り石」で、木造の土蔵の外壁に、防火性を高めるために薄い板状の大谷石を張っている。化粧ではない。そして目地はすべて漆喰。「石を目地でしっかり留めるのは丁寧な作り方です」と安森氏は話す。

宇都宮は城下町であるとともに宿場町でもあり、日光街道と奥州街道の追分であることから大いににぎわったという。この家屋にも宿場町の佇まいが表れている。



- 1 2階の座敷。主屋は内部に良い材料をふんだんに使っている
- 2 旧奥州街道側から見ると、見世蔵と袖蔵の構成がよくわかる。右手が主屋で、左手に新蔵、その奥に文庫蔵と石蔵が立つ
- 3 手前から石蔵、文庫蔵、新蔵。文庫蔵では出入口の軒を支える柱にも大谷石を張っている



3



1

日本聖公会 宇都宮聖ヨハネ教会礼拝堂

1933年

設計 | 上林敬吉

英国中世風の建築に素朴な大谷石の妙

平屋の礼拝堂に3階建ての塔屋が付き、構造は鉄筋コンクリート造。設計はジェームズ・マクドナルド・ガーディナーに師事した、日本聖公会の信徒建築家・上林敬吉。大谷石で外壁を覆ったのは、組積造の壁への志向のほかに、永続性の表現を試みたものかもしれない。全体的に素朴にまとめながら塔屋の四隅の控え壁では段々状の意匠により上昇感を表現している。

大谷石は稀少な「虎目」を用いている。黒色模様が入る虎目は、いまは採掘することができない。大谷層の上部から産出し、露天掘りで採るまで空気にさらされてきたので、採掘後も変色することがないという。

塔屋の頂部に低い胸壁を付けるのはノルマン（11世紀）、塔屋の四隅や外壁に控え壁を設け、開口部を尖頭アーチか細長い矩形にするのはゴシック（12世紀後半-15世紀）に源泉があるディテールだ。切妻屋根をシザーズトラスで支え、それを内部に露出させることや、トラスの下弦材の形状（四心尖頭アーチ）などはチューダー（15世紀末-17世紀初頭）に由来する。さまざまな時代の建築言語を近代工法と合致するかたちで融合し、そこに地域材の大谷石を用いているところがこの礼拝堂の特徴だ。

敷地内で隣接する旧・仮礼拝堂兼幼稚園舎（1912年築）は大谷石の石積みでできている。



2



3



4

- 1 南東側の外観。3層の塔屋は玄関間とポーチを兼ねる
- 2 控え壁を設けることで外観の意匠にリズムが生まれている
- 3 大谷石は光の当たり方で色や表情が変わる
- 4 内部は内陣と身廊に礼拝準備室、オルガン空間、玄関間を兼ねる塔屋を付した鍵形平面で漆喰壁

ちよっ蔵広場

竣工 | 2006年

設計 | 隈研吾建築都市設計事務所

大谷石を活かしながら透明性を獲得

大谷石積みで古い米蔵を保存再生した多目的イベントホール「ちよっ蔵ホール」と、解体した石蔵の大谷石を再利用して新たに建てた多目的展示場の2棟からなり、人々のコミュニティ活動の中心となるようにつくられた駅前広場。隣接するJR宝積寺駅や、線路沿い北側の公園とともに隈研吾建築都市設計事務所が設計を手がけた。

多目的展示場では、大谷石と鉄板を組み合わせた独自の構造システムにより、“半透明な石の壁”を実現。地元で親しまれてきた大谷石の独特の素材感を活かしながら、従来の石の建築には達成できなかったオープンな公共空間の形成を目指した。石積みは構造上、開口部を設けにくく、どうしても閉鎖的なつくりになるが、大谷石の使い方に新たな可能性を示した格好だ。隈氏は発表時の雑誌に「大谷石を使った組積造であり、同時にスチールプレートをダイアゴナルに編み上げてつくった鉄製のカゴでもある」と記し、その様子を「石と鉄を織り上げたファブリック」と喩えている。



1



5



2



3



4

- 1 ちよっ蔵ホール。控え壁があるのは「積石」の証し。控え壁のないホール後方は増築部分で、壁を大谷石の菱形パターンにして、新旧の壁を対比させつつ連続させている
- 2 多目的展示場側からホール側を見る。広場の舗装には、町が収穫した米の粃殻をゴムチップと樹脂で固めてつくったシートを使用
- 3 菱形パターンの壁は大谷石と鉄板を組み合わせた独自の構造
- 4 菱形パターンの壁を裏側から見る。光と影によりまた違う表情も生まれる
- 5 多目的展示場では天井仕上げの珪酸カルシウム板も菱形パターンに切り欠き加工を施し、広がり一体感を演出



1

旧大谷公会堂

竣工 | 1929年 移築・復元 | 2023年

設計 | 更田時蔵

大谷石による構造体に 旧帝国ホテル風の装飾彫刻

昭和天皇の即位大典を記念し、帝国在郷軍人会城山村分会から発注され、設計は栃木県の建築家の草分け、更田時蔵（1893-1962）が手がけた。構造は壁が大谷石による組積造、小屋組は木造キングポストラスで、目草など一部に鉄筋コンクリート造が用いられている。屋根は建築当初はスレート葺きだったと推測される。2004（平成16）年に国の有形文化財に登録された。

目を引く正面妻側の4本の付け柱（ピラスター）には、幾何学的な文様が彫り込まれ、フランク・ロイド・ライトが設計した旧帝国ホテルを思わせる。中央の2本は通し柱の形にもしている。内部は中央に長方形平面のホール、四隅に正方形平面の小部屋がある構成だ。

現在地に移築する前は、道路拡張工事によって側面が削られ、装飾柱の頂部が脱落したり、入り口の扉や開口部のサッシが撤去されていたりした。それを建築当初の姿に復元するとともに、観光周遊拠点施設「大谷コネクト」の一部として整備され、2023（令和5）年11月にオープンした。今回の移築では、風化がひどい部分は新たな大谷石を切り出して交換、ある程度の風化はモルタルによる補修という形で対応。外壁をよく見ると、新旧の大谷石の違いがわかる。



2



3

- 1 「大谷コネクト」全景。右手に立つのはビジターセンター
- 2 この建物で印象的な付け柱は、中央の2本が通し柱の形。柱頂部の球形の装飾も旧帝国ホテル風
- 3 ホール内部。小屋組は木造トラス。更田は1923（大正12）年に栃木県で初めて建築設計事務所を開設した

宇都宮 建築めぐり

UTSUNOMIYA

- 参考
- 宇都宮市大谷石文化推進協議会ホームページ「日本遺産 地下迷宮の秘密を探る旅」(https://oya-official.jp/bunka/) 2023.11.10アクセス
 - 宇都宮市大谷石文化推進協議会 編「大谷石文化への誘い：その歴史と魅力を探る」宇都宮市大谷石文化推進協議会、2023
 - 宇都宮市ホームページ (https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/) 2023.11.10アクセス
 - 宇都宮まちづくり推進機構ホームページ (https://www.machidukuri.org/) 2023.11.10アクセス
 - 宇都宮美術館 編「二つの教会をめぐる石の物語」下野新聞社、2023
 - 宇都宮まちづくり推進機構 歴史的建物活用特別委員会 企画・編集「石の街うつつのみや遺産と景観」宇都宮まちづくり推進機構、2016
 - NPO法人 大谷石研究会 編「大谷石百選」市ヶ谷出版社、2008
 - NPO法人 大谷石研究会ホームページ (http://www.oooyaishi.org/index.html) 2023.11.10アクセス
 - 『建築文化』彰国社、1971.12、1973.1
 - 『商店建築』商店建築社、2001.4、2007.4
 - 『新建築』新建築社、1974.1、1989.11、1992.1、1997.6、2008.7、2008.8、2010.3、2021.3
 - 橋本優子 編、宇都宮美術館開館20周年・市制施行120周年記念図録「石の街うつつのみや：大谷石をめぐる近代建築と地域文化」宇都宮美術館、2018
 - 文化庁 国指定文化財等データベース (https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index) 2023.11.10アクセス

おことわり
04-21ページの作品名称は文化財指定・登録名称とし、ほかは原則として2023年10月時点の施設名称を使用しています。

宇都宮の大谷石建築を中心にめぐってみよう。石の産地、宇都宮市北西部の大谷町一帯と、宇都宮市街で主な建築が見られる。

大谷町では大谷街道がメイン道路。主要な建築が付近に分布し、旧大谷公会堂、石材店の社屋、大谷寺などが連なる。大谷街道から分岐する瓦作街道は、かつて石材を搬出する軌道に沿った道で裏街道にあたり、いまはひっそりしているが、蔵のリノベーション例(キジハジメテナク)などがあり、将来の可能性を感じる。また大谷石は大谷町一帯に埋蔵されていて、使われなくなった地下採掘場への立坑跡が至るところで見られる。旧来より農家が敷地の石を採掘してきた名残だ。かつて地下採掘場だった大谷資料館、現在も稼働しているカネホン採石場などは見学が可能だ。

市街地には震災を生き延びて、豪商の住宅、公共施設、教会堂などの大谷石建築が残っている。石は採掘場所で少しその様相を変える。大谷石に特徴的な空隙・ミソの大きさ、微量成分などで硬さや色が変わるので、大谷の北に徳治郎町があり、そこで産出するのが大谷石に似た徳治郎石。これを使った集落がいまも見られる。

最盛期に比べ採掘量は減り、地域の観光化が進んでいる。一方、現在も生産は続き、現代建築に活かされている。再生事例も注目され、宝積寺駅のちよっ蔵広場は話題になった。大谷石そのものが長寿命の素材だが、どの時代にも合う、古くて新しい素材ともいえる。

写真 | 小松正樹 (特記以外)

MAP 1 | 宇都宮広域地図



MAP 2 | 大谷町周辺



MAP 4 | もみじ通り周辺



MAP 5 | 南宇都宮駅周辺



MAP 3 | 宇都宮市中心部



01 ▶p.09参照
徳次郎町西根集落

02
宇都宮市水道
今市水系
第六号接合井
設計 | 不詳
竣工 | 1915年
宇都宮市上金井町
635-5



日光街道沿いの小高い丘の上に、アール・デコ様式の建物が立つ。主要な機能は丘の下に埋められたコンクリート造の池で、日光市から宇都宮市へと敷設された延長約25kmの送水管にかかる水圧を、池に水を注ぎ直すことで緩和させる役目をもつ。通水が開始された1909年当時は、標高が30m下がるごとに6つの接合井があったが、1949年の今市地震によって創設当時の姿を残すのはこの施設のみ。基礎と隅石に大谷石が用いられた八角形の建屋は、祝祭感に満ちている。現在は水道施設としての役目は終え、同市の近代水道の創設を伝える施設として保存。国の登録有形文化財、土木学会選奨土木遺産

05
宇都宮市水道 戸祭配水場配水池
設計 | 不詳 竣工 | 1915年
宇都宮市中戸祭町2841-2
平成になりタワー状の高架水槽が設けられ、遠くからも望めるこの高架水槽に目を引かれるが、その足元にこそ注目したい。宇都宮市に近代水道が創設された大正初期から、いまでも現役で宇都宮市内に給水している配水池だ。主要な施設は、盛り上がった地面の下にある3900m³の水を蓄えた2つの池だが、その側壁が美しい。黒みがかった焼過煉瓦を使った12連のアーチに、階段と隅部には花崗岩があしらわれている。国の登録有形文化財、土木学会選奨土木遺産



06
日環アリーナ栃木 (栃木県総合運動公園東エリア)
設計 | 梓設計・大成建設・安藤設計 設計共同企業体 竣工 | 2021年
宇都宮市西川田4-1-1
栃木県で初めてPFIによって建設された。メインアリーナ、サブアリーナ、屋内水泳場のほかウェルネスエリアなどの運動施設からなる大規模複合スポーツ施設だ。切り立つ岩山のような佇まいは大谷石採掘場がモチーフとなっており、木目のついたプレキャスト板仕上げの外装のくぼみ部分には、本物の大谷石が用いられている。受付カウンターなど内装にも大谷石が使われているが、中高層建造物への外装利用は国内初。メインアリーナと水泳場をつなぐ大屋根の軒裏には、日光杉が採用されている。2021年度マロニエ建築優良賞、2021年度グッドデザイン賞ほか受賞



03
若竹の杜 若山農場トイレ
設計 | ビルススタジオ
竣工 | 2021年
宇都宮市宝木本町2018



日本一の面積を誇る美しい竹林がある。かの地で100年以上にわたって筍を生産する農場だ。筍はわずか2カ月で竹に成長し、放っておくと人を寄せ付けなほどの藪となる。さらに、竹材の利用が時代の趨勢を受け減少したため、手入の行き届いた竹林そのものが希有な存在となった。この竹林が映画などのロケ地に利用されたことで話題となり、近年、竹の魅力発信のため観光農場として開放。夜間にはライトアップも行っている。「宇都宮は近隣観光地への通過点。市内周遊のきっかけに、また竹を身近に感じてほしいと思い開放しました。そこでまず望まれたのがトイレでした」(ワカヤマファーム 若山太郎代表)。トイレにつづき、古い石蔵はギャラリーに改装。2023年にはレストランもオープンするなど新たな試みが続く

04
宇都宮美術館
設計 | 岡田新一設計事務所
竣工 | 1996年
宇都宮市長岡町1077



宇都宮市の市制100周年事業として丘陵地に建設された美術館。広大な自然の中、中央ホールを中心に3つの展示棟が地形に沿って森の中へと三方に延び、展示室を囲むガラスの回廊からは美しい自然の風景が楽しめる。ここではアプローチから壁材に至るまで、ふんだんに大谷石が用いられており、その表情はとも柔らかない。「岡田新一の軌跡は、こうした困難な課題に取り組んで、日本における近代建築を石を用いて表現する道を示すものとなったのである」(鈴木博之「JA」新建築社、1997.1)。同設計者が手がけた、石を用いたほかの建築と比較しながらめぐってみたい。BCS賞受賞

07
宝積寺駅
設計 | 隈研吾建築都市設計事務所 竣工 | 2008年
高根沢町宝積寺2377-1
「ちよっ蔵広場」(14ページ参照)と一体的にデザインされた駅舎だ。かねて望まれていた駅舎の橋上化と東口の開発にあたり、先に整備された「ちよっ蔵広場」の大谷石のひし形のパターンが木梁に引用されている。大胆な木梁の印象とは対照的に、細くリズムカルな柱とガラス張りの壁によって、見通しのよいヒューマンスケールな駅舎であることに驚く。日が暮れると、木梁の間に仕込まれた照明から木漏れ日のような光が落ちる。2008年度 鉄道建築協会賞入選、第10回ブルネル賞 建築部門 推薦賞ほか受賞



08 ▶p.14参照
ちよっ蔵広場
設計 | 隈研吾建築都市設計事務所 竣工 | 2006年
高根沢町宝積寺2416

09 ▶p.10参照
大谷石産業 石の里希望
開坑 | 2009年

10 ▶p.04-05、p.10参照
カネホン採石場
採掘開始 | 1854-1956年(手掘り)、1957年-現在(機械掘り)
宇都宮市大谷町209

11 ▶p.06参照
大谷資料館
採掘期間 | 1919-1986年
資料館開業 | 1979年
宇都宮市大谷町909

12 ▶p.09参照
大谷寺
創立 | 810年
宇都宮市大谷町1198

14 ▶p.08参照
平和観音
宇都宮市大谷町1156-2

15 ▶p.15参照
旧大谷公会堂
設計 | 更田時蔵
竣工 | 1929年
移築・復元 | 2023年
宇都宮市大谷町1271-2

16 ▶p.08参照
大久保石材店
設計 | 池田長重
竣工 | 1924年
宇都宮市大谷町1132

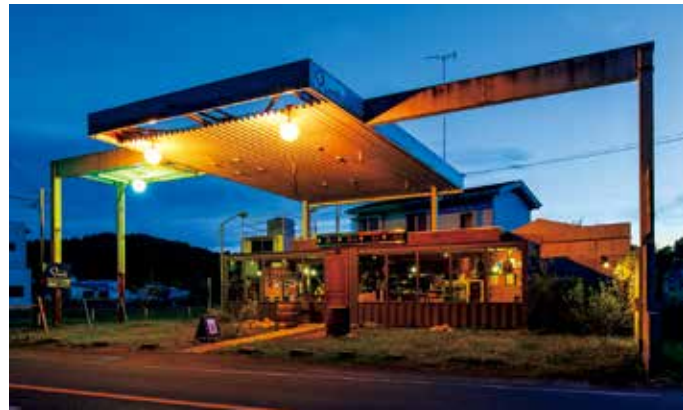
13
OHYA BASE
設計 | 不詳
改修設計 | ビルススタジオ
竣工 | 1980年ごろ
改修 | 2020年
宇都宮市大谷町1240



大谷石採掘場跡地を活用した体験型観光ツアーを展開する、「LLPチイキカチ計画」の活動拠点として誕生した複合施設。建物は、大谷石の生産量がピークを迎えた昭和50年代につくられた元宴会場で、2013年の廃業まで地域の会合に利用されていたという。壁や天井は抜いたが、窓まわりは以前のままとし、宴会場時代の小さな舞台も残る。「大谷でできることを増やす場所」をコンセプトに、コワーキングスペース、コーヒースタンド、ライブラリー、レンタルスペースなどの機能を有し、手前には、渡邊哲夫氏が大谷石彫刻を手がけた特別個室をもつ地産地消レストラン「OHYA FUN TABLE」が入居。大谷散策の途中に立ち寄ってみたい



17
Punto -大谷町食堂-
設計 | 五位野一級建築士事務所
改修設計 | ビルススタジオ
竣工 | 1988年 改修 | 2020年
宇都宮市大谷町1152
大谷の中心地に立つ、創作イタリア料理店。「尊敬する方から、店づくりはまちづくりと聞き、いつかは自分も店をもちたいと考えはじめたんです」と語る高橋オーナーは、「OHYA BASE」の改修工事に携わった一人。物件を探すなか、当時、宇都宮大学で教鞭をとっていた塩田大成氏(ビルススタジオ)が、大谷町に実在する建物を対象に、その活用を学生課題として知っていることを知る。このスタンドも対象のひとつだった。一方で、店舗探しは難航した。そんななか市役所から紹介されたのが大谷をよく知る義父であり、義父から紹介されたのが、その昔、義祖父が経営していたこのガリンスタンドだった。そこから店づくりは加速。元の建物を活かし、水銀灯や価格表示板もそのまま残し、コンテナで増床。大谷街道沿いのランドマークとなっている



20
作新学院高等学校丸形体育館
設計 | 巴組鉄工所 竣工 | 1952年
宇都宮市一の沢1-1-41
巴組鉄工所の創業者・野澤一郎が開発した、無柱、無梁、斜交材で大空間をつくるダイヤモンドトラスの技術を体育館に応用した初の事例だ。現在の作新学院一の沢キャンパスは、旧日本軍の兵舎があった場所。戦後、この地に校舎を移転。移転後間もなく、この体育館がつけられた。その後、生徒数の増加に伴い、新たな校舎や体育館がつけられるなかでも使われつつ、現在は部活と情報科学部専用の体育館として利用されている。学院入り口そばに立つ、多くの卒業生たちにとって思い出のある施設だ。日本におけるDOCOMOMO Japan選。隣接するアカデミア・ラボは、鈴木エドワードの設計で2017年の竣工



18 ▶p.08参照
屏風岩
設計 | 渡辺陳平(西蔵、東蔵)、清水建設(事務棟)
竣工 | 1908年(西蔵)、1912年(東蔵)、1977年(事務棟)
宇都宮市大谷町1088

19 ▶p.11参照
キジハジメテナク
設計 | 不詳
改修設計 | アガ設計工業
竣工 | 1927年
改修 | 2023年
宇都宮市大谷町798-34

21
栃木県立美術館
設計 | 川崎清+建築研究協会(1期)、川崎清+環境・建築研究所(2期)
竣工 | 1972年(1期)、1981年(2期)
宇都宮市桜4-2-7



大阪万博の「万国博美術館」(のちの国立国際美術館、1970)を手がけた川崎清の設計による、日本における公立近現代美術館の先駆けとなった施設。敷地は日光街道と大谷街道が交差するあたりに位置し、ハーフミラーの高層の事務棟と低層の展示棟、人工池に面した屋外展示場で構成されている。低層棟のガラス面は当初透明だったが、その後、作品への配慮から不透明に変更された。美術館は、栃木県内の作品を中心に、国内外の近現代美術約9000点を収蔵。壁を斜めに振った展示空間とともに作品を楽しみたい

22

日本聖公会 宇都宮聖ヨハネ教会礼拝堂
設計 | 上林敬吉 竣工 | 1933年
宇都宮市桜2-3-27

▶ p.13参照

23

旧・宇都宮商工会議所遺構
設計 | 安美賀 竣工 | 1928年 移築・復元 | 1985年
宇都宮市睦町2-50
栃木県中央公園の木立の中に、威厳あふれる遺構がある。栃木県技師で、宇都宮工業学校(現・栃木県立宇都宮工業高等学校)の初代校長だった安美賀(やす・みよし)の設計による、宇都宮商工会議所の一部だ。鉄筋コンクリート造2階建てで、西洋建築の様式を駆使しながら、FLライトの影響を受けたと思われる大谷石張りやタイル張りを組み合わせた幾何学的な装飾が施された重厚な建築であった。しかし、1979年に惜しまれながらも解体。建物正面の一部がここに移築・復元された。宿場町から商工業都市へと発展を遂げた、宇都宮を象徴する遺構でもある



24

ダイニング蔵
おしゃらく
設計 | 不詳
改修設計 | シオダ建築
デザイン事務所
竣工 | 1938年
改修 | 2011年
宇都宮市宮園町8-9



築70年を超える公益質屋の石蔵を改修して誕生したレストラン。行政とNPO法人、民間事業者の協働によって、大谷石蔵の活用と中心市街地の活性化を図る、大谷石蔵活用事業の第一弾でもある。石蔵は、1991年の公益質屋の廃止後は、文化財の収蔵庫として活用されてきた。1階は全面板張り、2階の窓は木枠で開口部が閉じられていたのを、耐震補強をしながら本来の姿へと再生・改修。ツルハシの跡が刻まれた、手掘りの大谷石の表情を食事とともに楽しみたい。宇都宮市まちなみ景観賞受賞



26

栃木県自治研修所
(現・栃木県庁舎研修館)
設計 | 菊竹清訓
竣工 | 1979年
宇都宮市鳩田1-1-20
栃木県庁舎本館裏手の斜面地に立つ、地形を利用して建てられた研修所。シンプルな四角い箱形の建築に、エントランスの反り上がった庇がアクセントを与えている。3階レベルに設けられた入り口から内部に入ると吹き抜けをもつ開放的なロビー空間が広がり、この壁には大谷石が使われている。竣工から約40年たつが、職員向けの研修のみならず、セミナーや講習会などで多くの県民にも利用されているという。手すりやドアハンドル1つにも趣向が凝らされた、竣工当時から姿を残す貴重な建築だ



25

栃木県総合文化センター
設計 | 前川建築設計事務所
+MIDO同人
竣工 | 1991年
宇都宮市本町1-8



県庁を中心に文化施設が立ち並ぶ一角に立つ、ホール、ギャラリー、会議室などからなる複合施設。周辺のスケールになじむよう、向かいにあった栃木県議会棟庁舎(設計 | 大高正人、竣工 | 1969年、解体 | 2007年)と建物の高さをそろえて計画され、南北に延びるピロティが、ホール棟とそれ以外をおさめた棟とを結ぶ。メインホールの側壁は大谷石だ。中央と両サイドの客席の傾斜を変えて、音響性能の向上を図っている。大谷石でつくられた照明も、ぜひ近くで見たい。エントランスのディテールや色使いなど、前川國男らしさが随所に見られる建築だ。栃木県マロニエ建築賞受賞、優良ホール100選

27

栃木県立図書館
設計 | 栃木県立図書館
設計研究会(代表 吉武泰水)
竣工 | 1971年
宇都宮市鳩田1-3-23



県庁東側の丘を切り開いて建てられた、彫りの深い外観が印象的な建築だ。内部はトップライトをもつ吹き抜けを中心に、スキップフロアで構成。階高が抑えられた地下1階の読書活動支援室は、子どもへの配慮がうかがえる。大規模な耐震改修工事後も、アプローチの大谷石の壁、床や壁の丸タイル、本の背表紙を想起させる壁の意匠などが竣工当時のまま残る。4階のグループ学習室は、一時期、喫茶室として使われていた歴史をもつ。同図書館では、栃木県に関するあらゆる分野の資料を網羅的に収集し、「地域資料室」では約2万冊を公開。栃木を知ることのできる重要な場所でもある

28

石の蔵
設計 | 不詳
改修設計 | 新藤力ノパワー
竣工 | 1954年
改修 | 2001年(レストラン)、
2006年(個室、ギャラリー・ショップ)、2016年(ラウンジ)
宇都宮市東鳩田2-8-8



3度の改修によって、宇都宮市内最大規模の大谷石の食料倉庫に新たな命を吹き込んだ、飲食、物販、ギャラリーからなる施設。当初、蔵の内部の大部分は板で覆われていたが、それらあとから付加されたものを取り除き、「原型に戻そうと考えました。(中略)地域の中で蔵が過ぎてきた数十年を大切にしたいという思いがあります」(新藤力、石の蔵ウェブサイトより)と、手掘りの大谷石がもつ魅力を存分に引き出した。外観はガラスの箱を挿入した以外は以前のままとし、内部の耐震のため追加した柱は、和紙で巻いて光柱としてしつらえて空間に溶け込ませた。照明や什器、レリーフに至るまで、大谷石を軸に丹念につくり込まれた洗練された空間が広がる。宇都宮市まちなみ景観賞受賞



29

旧篠原家住宅
設計 | 不詳
竣工 | 1895年(主屋・新蔵)、1851年(文庫蔵)、1851年ごろ(石蔵)
宇都宮市今泉1-4-33

▶ p.12参照

30

栃木県立宇都宮産業展示館(マロニエプラザ)
設計 | 神谷五男+都市環境建築設計所 竣工 | 1988年
宇都宮市元今泉6-1-37
丹下健三+都市・建築設計研究所を経て、地元・宇都宮で設計活動を行う神谷五男の設計による、約3000㎡の無柱の大展示場と大・小ホール、会議室などからなるコンベンション施設。建物から飛び出すボックス状の梁は内部に光を取り入れる役割をもち、竣工当初、中には設備機能がおさめられていた。またボックスの色はフッ素樹脂焼き付け塗装によるグレーだったが、後年の改修時に赤色に塗り替えられた。外部だけでなく、益子焼の陶板タイル、地場産の大谷石と集成材が用いられた内部も圧巻だ



33

もみじ図書館
設計 | 不詳 改修設計 | ビルスタジオ 竣工 | 1968年以前 改修 | 2019年
宇都宮市西3-4-8
築50年を超す賃貸アパートの一角に誕生した民間運営の図書館。ときにコーヒーショップや地元のサークル活動の場ともなる空間には、地元住民から寄贈された本がぎっしりと並び、図書館があるのは、元商店街「もみじ通り」だ。塩田大成氏(ビルスタジオ代表)は、シャッター通りだったこの地にオフィスを構えたことをきっかけに、もみじ通りへの飲食店の出店を仲介するとともに、図書館の開設・運営に至った。図書館は基本は無人で誰もが自由に出入りできる、まちのリビングのような存在であり、出店した飲食店などそれぞれの活動が地域に根を下ろし、ゆるやかにつながることで、かの地に再び営みを生み出している



34

悠日
設計 | 不詳
竣工 | 1953年 改修 | 2009年
宇都宮市吉野1-7-10



南宇都宮駅北側に、戦後、米の貯蔵庫として建てられた石蔵が立ち並ぶ一画がある。そのなかで一早く石蔵を活用しはじめた施設。オーナー夫妻はともに地元の出身で、石蔵のある風景に親しんできた。使われなくなっていた石蔵1棟を借り受け、2005年にギャラリーとして再生(現在は別の施設が入居)。その後、現在入居する蔵をライブハウスと飲食施設へと改修した。改修は主人自ら計画した。飲食部分は洋風小屋組みと米俵を支えた木枠がそのまま残る。機械掘りと手掘りによる、大谷石の表情の違いにも注目だ。地元出身のジャズサクソプレーヤー・渡辺貞夫氏も惚れ込んだ、その音響も楽しみたい

